

加害と被害を描いた画家 坂本正直

山口 洋司



「命令・勝哉号は歩けん ここにおけ」坂本正直

「その晩、歩哨に立っていて、突然目の前に現れた中国人を撃ってしまうのです、それなのに歩哨を交代した後、平気で眠ったと思うのです」

いっかんして戦争の記憶を描き続けた画家、坂本正直さんの遺作の展示が5月に南京町のギャラリー「蝶屋」で開かれていました。

その画家については不勉強で何も知らなかったのですが、たまたまチラシを見て、駆けつけたのです。そこには画家自身が体験した戦争の被害と加害を真正面から捉えた作品が画家自身の日記に印されたコメントや画集などとともにずらり展示され、圧巻でした。

軍用トラックにひかれ、するめいかのように道路にへばりついた兵上の死体、踏み付けられ散乱する手首と軍服と、徴用され、クレーンで吊りあげられ輸送船に運ばれる弾薬運びの軍用馬、あげく痩せ衰え、使い捨てにされた馬、置き去りにされ、その悲しげな目つき、いずれも重厚で実直<これが戦争の現実なのだ>と見るものの魂をゆさぶるように問いかけてくるのでした。

坂本正直さんは大正3年宮崎の出身です。2011年に97歳で亡くなっています。中国と台湾へ2度、招集を受け従軍、主に馬とともに軍事物資を運ぶ部隊に所属、絵画の方ではかねてから須田国太郎に指導を受け、復員後は山口薫に師事。武蔵野美術学校を卒業後、独立美術協会を経て、モダンアート協会展を中心に活動する抽象絵画の画家だったのですが、ベトナム戦争の現実に触れ自身の体験、記憶を残そうと体験した加害と被害を作品に刻み込んできたのです。

多くの遺作品は坂本画伯の長女の所薫子さんが管理、寄贈した立命館大学国際平和ミュージアムや所さんが開設するウェブサイト「坂本正直記念館」でも見ることが出来ます。

「出征して1年たった兵士の神経は平常でなかったのは確かです。戦場でつくられた精神状態はどんなものか、どんなものであったかを描いてみたかった」「殺した人への弔い」でもある、と坂本さんは日記に記します。

状況が変われば人間が変わる。戦争が人間を変える、今、ガザやウクライナ、それにイランやイスラエルで生々しい現実があります。日本でも国のかたちがいっつも戦争が出来る状態になってきています。こんな時だからこそ坂本画伯の魂の表現が余計輝きます。<2度と子どもたちを戦場に送るな>、平和への祈りを込めた坂本正直画伯の気迫の記憶画に強い感絡を受けたものでした。